

2018年度学校評価 改善の方策(2019年度に向けて)				
評価の観点	評価項目	達成状況	本年度の取り組みと改善の方策	学校関係者評価 コメント
① 基礎基本	わかる喜びのある授業づくり	B	<p>研究中心教科を国語科(説明文)とし、キーワードカードを活用するなど系統立てた研究をすすめることができた。継続して研究してきた「書くこと」に加え、書いたことを元に伝え深めることを意識した授業作りを心がけた。その結果、自分の考えを自由に書く力は伸びてきたと感じる。また、ペアやグループ学習を用いることで、伝え合うこともできた。さらに、文章題の解き方を全校で統一して作成し、それを生かして週に1度の朝のプリント学習に取り組んだ。長文の読み方を身につけることで、文章を読むことに対して抵抗が少なくなってきたと感じる。来年度も継続して、児童が主体的に学ぶことができるようになりたい。</p>	<p>家庭学習への支援については、新規に始まった家庭学習強化週間を定着させる方向でいいのではないかと。まずは、その強化週間だけでも親子共に意識が高くなるので家庭学習定着への一歩となる。保護者の中には、早くから保育園に入れておられるので、本来親自身が丁寧に子どもを指導するという感覚が薄れている傾向も見られる。子育てのヒント等を提示することも必要である。学習面では、文章の読解力をぜひ高めてほしい。</p>
	個に応じたきめ細かな指導		<p>兵庫型教科担任制により、専門的な知識を生かした指導を行うことで知識・理解の向上に努めている。低学年では、「がんばりタイム」を設定したり、スクールアシスタントによる学習支援があったりすることで学力保障ができています。中学年以上では、休み時間を利用して個別指導を行うことで基礎学力の向上に努めている。今後も、個に応じた指導の充実を図りたい。</p>	
	読み書き計算(モジュール学習等)の徹底反復		<p>今年も、音読の講師を1学期に招いて研修を行った。各学年が「モジュールカリキュラム」に従い、3～5つ程度の名文を暗唱できるように積み上げを図ることができた。いきいき集会でどの学年も音読発表を行い、成果を確認し合った。今後も継続して取り組んでいきたい。</p>	
	家庭学習への取り組み		<p>基礎・基本の定着をより効果的にするために、学期に2回の家庭学習強化週間を設け、家庭と連携し、望ましい家庭学習を推進した。目標時間は、学年×10分+10分を目安として取り組んだ。期間中は、自主学習ノートの提出が増えたり、忘れ物が減ったり、学習への意識が児童・保護者共に高まった。しかし、家庭での関わりに個人差があったり、土日の学習時間の確保が難しかったりと課題もあるため、引き続き取り組んでいく必要がある。</p>	
② 道徳教育 人権教育	規範意識や道徳的判断力を高める授業	B	<p>児童に規範意識や道徳的判断力がついたかどうかは道徳の授業の中では判断できない。道徳の授業においては、心を耕し、育てることを目指して内面の力を伸ばすことを念頭に置いて指導していくことを確認した。今後も、考え議論する道徳の授業を目指して研修を充実させていく。</p>	<p>児童や保護者は、友だちと仲良くしたり、思いやることのできているという回答が多いが、教職員は子どもたちに道徳的判断力が身につけているかについて不安に思う状況もよくわかる。子ども自身、生活の中でいろいろな感情を経験しなければその力は養われないだろう。他の子と笑顔で楽しく関われる場づくりが必要ではないか。</p>
	自己を高め、友だちを思いやる心や態度の育成		<p>教師自らの人権感覚を磨き、人権集会や道徳の授業、「多可町子ども憲章」の唱和など、あらゆる場面をとらえて児童の人権感覚を養うようにする。また、児童会活動や縦割り班による異学年の交流活動を充実させ、自分の役割を自覚できる場を作り、周りから認められる機会を増やすことで自尊感情の向上を図る。さらに学校だけでなく、家庭にも働きかけ、周りの人や友だちを思いやる態度を育成する。</p>	
	道徳の教科としての評価		<p>道徳ノートや板書など、根拠を明確にして評価することはできていたが、さらに複数の指導体制で授業を見て児童の様子を見取ったり、聞き取ったりする評価活動を取り入れ、より客観的な評価ができるようにしていく必要がある。</p>	
③ 特活 学校行事	児童の主体性を重視した活動の充実	A	<p>北播磨地区子ども会議や町主催のストップいじめサミットなどで出た、いじめをなくすための活動や学校全体が仲良くなるための遊びなどを児童会が中心になって自主的に全校生に広めることができた。また、年度初めにリーダー研修会を開き、自主的自治的な活動を支えるリーダーとしての行動や資質について考える時間を持った。今後もこのような活動を通して児童の主体性を伸ばしていく指導体制を整えていきたい。</p>	<p>6年生を中心に学校をリードしているようすがよくわかります。児童も張り切っているのでぜひ継続してほしい。</p>
④ 特別支援 教育	特別支援教育に係る研修の充実と共通理解	B	<p>講師を招聘し、特別支援学級の授業研究を通して児童の実態や個に応じた合理的配慮について共通理解を図り、研修することができた。また、年度初めには、専門機関に講師を依頼し、支援を必要とする児童についての児童理解及び具体的な支援方法などについて助言をいただき支援にいかすようにした。それらを記録に残し、職員間で情報交換を進める中で共通理解を図るようにした。また、秋には臨床心理士を講師に招き、校内研修会を開いて「心の健康アンケートとその活用」について研修した。今後もこれらの取組を継続し、課題のある児童についてはそのつど職員間で特性や関わり方、合理的配慮についての情報を共有できるように努めていきたい。そして、より多くの職員が学校生活全般において児童に関わっていく体制づくりを進めたい。</p>	<p>サポートファイルを保持している児童や特別な支援を要する児童が多く在籍しているようすがよくわかりました。すべての児童への関わりはなかなか困難ではあるが、一人ひとりの教育的ニーズに応じられるように、さらなる行政による人的支援が望まれます。</p>
	一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援		<p>サポートファイルを持っている児童や支援を要する児童についての外部の専門機関に児童観察を依頼し、よりの確な支援方法についての指導助言を受けた。それをもとに各担任が支援計画や指導計画を立て、個に応じた支援を行ってきた。また、職員朝会や職員会議の場で情報交換を行って職員間で情報を共有し、多くの職員が関わっていくようにしたり必要に応じてさらに専門機関につないだりして、教育的ニーズに応じた支援が行われるように努めている。今後も、常に支援計画や指導計画を見直しながら支援を継続していきたい。</p>	
⑤	生命を守る安全教育の推進		<p>毎月の登校指導と下校指導を実施した。いろいろな課題が各班で見られるが、その都度担当教師による指導や全体指導を通して安全な登下校を意識させることができた。また、今年度は基本的な下校の方法として一斉下校を行った。集団で下校することに抵抗がなく、高学年の意識が高まった。来年度に向けては、登校指導後の記録(伝言板に掲示)を徹底していくことが必要である。特定の地区で何度も問題が発生した時、全職員で指導に取り組むことができたが、どこまで対応していくかが今後の課題である。</p>	<p>登下校中における不審者の出沒事案を他の校区ではあるがよく耳にします。集団下校といえども、児童の数が減っており、家が遠方の児童は最終的に1人になる</p>

安全・防災	実践的な態度や能力を育てる 防災教育の推進	A	年4回の避難訓練と1月の防災学習(キッズ防災検定を含む)を通して、実践的な態度や能力、知識を身につけることができた。今年度は防犯カメラの導入により、不審者対応訓練を2回実施した。来年度に向けては、現状の内容を維持することが望ましい。その中で、火災を想定した避難訓練では「口や鼻をハンカチで覆う」こと、地震を想定した避難訓練では「頭を守る」意識や行動の徹底をさらに進める必要がある。また、「火災」の避難と「地震」の避難は根本的に違うことを今一度考え直す必要がある。地震時には、まず避難経路の確認が必要であるなど、より実際の場面を想定した訓練の計画・実施を考えていきたい。	ことが考えられる中で、防犯上大変危惧されます。特に下校時の見守り活動のスタッフが増えるような取組が必要です。
⑥ 健康・食育	健康に関心を持ち、体力向上に取り組む児童の育成	A	毎月第2週目を「元気もりもり週間」とし、規則正しい生活習慣を身につけさせることを目的として元気もりもり大作戦を実施した。早寝・早起き・朝ごはん・朝うんちの項目に加え、今年度は月ごとに「今月のめあて」を決め、取り組んだ。	家庭の教育力向上には必要な取組であると考えます。チェックカードの家庭からの回収を徹底して、提出物を提出しない親の姿を子どもに見せないでほしいと思う。
	望ましい食習慣の育成		元気もりもり大作戦の中で、朝食を食べることをめあてに取り組んできた。また2学期には、「多可町朝ごはんチャレンジ」の取り組みの中で、全クラス対象に栄養士による朝食指導を実施した。90%以上の児童が毎日朝食を食べているが、時間がない、食欲がない等の理由で時々欠食する児童がいる。来年度も、全児童が毎日朝食を食べることをめあてに、元気もりもり大作戦を実施するとともに、保健だより等でも保護者に啓発していきたい。学校給食センター栄養士や外部講師とも連携し、給食時間や授業時間における食育指導を継続して実施したい。	
⑦ 生徒指導	挨拶、掃除等の基本的な生活習慣の確立	A	挨拶については、1月から2月にかけて「生活のめあて」として取り組んだが、自分から進んで元気な挨拶ができていたとはいえない。本校でかつて取り組みのあった「あいさつ通り」などを参考に、来年度は具体的な取り組みを期間を決めて取り組んでいきたい。掃除については、準備音楽が定着し、時間通りに始めることができる。また、チャイム着席ができており、休み時間終盤には運動場に児童の姿が見られないよい習慣が定着した。安全タスキの着用については、一年間を通して下校時に児童会が中心となり継続したチェックに取り組んだことにより、着用率や着用意識が高まった。基本的な生活習慣について、できていることは来年度も継続して取り組みができるようにしていきたい。	挨拶について、子どもはよくできていると自覚しているのに、大人はそう考えていないのは、児童アンケートの文言を再考する必要があるのではないだろうか。具体的にどういう状況ができているのか、またできていないのかがわからずに回答しているのではないかと考えます。
	子どもと向き合い、子ども理解を深める生徒指導の徹底		普段の児童観察や対応に担任を中心として取り組むことができた。毎月実施している「学校生活相談シート」で子ども理解を深める生徒指導が徹底できた。相談のあった内容については、担任が中心となり聞き取りや指導を行った。また必要に応じて複数教員による対応ができた。児童会と連携し、今年度は夏休みや冬休みのくらしプリントで児童用を配布することができた。生活のめあてふりかえりシートを児童代表委員会で活用する方法が見えてきた。各学級での振り返り→代表委員会での発表→代表委員会で話し合い→話し合った内容を各学級へという流れを確立することで、さらに生活のめあてが意義あるものになってくると思われる。	
	不登校ゼロ、いじめゼロの実現		普段の児童観察に加えて、学校生活相談シート(児童用※毎月、保護者用※学期に一回)で情報収集に努めることができた。集まった情報については、生活指導委員会や会議録の伝言板掲示、職員会議で児童の様子を各クラスから伝えることなどを通して共通理解を図ることができた。不登校の傾向が見られたりいじめの情報があったりした時には、いじめ対策委員会を開き対応を協議したり、複数教員で対応したりすることができた。また、保健室と連携しながら不登校ゼロ、いじめゼロの実現に努めることができた。さらに、生活指導やいじめ対策については、即日対応を心がけて取り組むことができた。来年度も引き続き、不登校ゼロ、いじめゼロの実現に向けて今年度と同様に取り組んでいきたい。	
⑧ 教職員の 資質向上	教育の専門家としての資質・指導の向上を図る校内研修の充実	A	本年度も国語の研究授業の事後研修会で、グループ討議の後に全体討議の時間を設定した。話し合いの中で出てきた本校の課題について、一人一人が深く考え研究を進めることができた。他にも、特別支援教育、道徳教育、プログラミング教育など様々な研修に取り組んだ。来年度もさらに研究を深めていくために、研究分野を統一して取り組みたい。また、全国学力・学習状況調査等の結果の分析を生かし、さらに本校児童の実態にあった指導ができるようにする。	ずいぶんたくさんの時間を割いて、研修されていることがよくわかります。児童の能力向上に向けてお願いします。
	教師としての使命感や子どもに対する愛情、責任感		児童をより深く理解するために、児童の様子を全職員が共有したり、ストレスマネジメントの研修を行った。また、授業中には必ず教師も児童も「〇〇さん」とさん付けで名前を呼んだり、個々の話をしっかりと聞いたりする時間を確保することを心がけた。	
⑨ 施設・設備	学習・生活の場として適正な施設・設備等の管理・整備	A	各教室に書画カメラ、プロジェクター、黒板用スクリーンを常設し、手軽に画像や動画を提示できることで、学習効果を上げることができている。さらに、教室内のWi-Fi化により、新規導入されたタブレットを有効活用できる環境が整った。引き続き各教員のスキルアップを図っていく。	ICT機器を活用し視覚に訴えることは、多くの児童にとってわかりやすい方法です。教室の美化については、児童会を活用し、気持ちの良い教室にするには、どうしたらよいかを考えさせるなどの方法で取り組まれたらどうか。
	整理整頓された学びの場にふさわしい環境づくり		学習課題の解き方のヒントやキーワードを全ての教室に掲示し、6年間統一した指導が進められるよう工夫した。ただ、掃除における教室の手入れについては、教室差があるため指導を強化していきたい。	
⑩ 家庭・地域との連携	家庭や地域への情報発信と情報収集	B	昨年度と評価数値に変化は見られないが、C・D・Eの回答が減ってきており情報発信が評価されていると考える。ホームページや学校メール、防災無線と情報の重なりが発生するが、情報漏れのないように継続していきたい。	ホームページは、何を求めて閲覧するかは人により違うので、情報量は多くなくても、タイムリーな更新は必要である。行政防災無線も児童の声で流れるので効果的である。
	保護者や地域の人々と連携した教育活動の推進		保護者と教職員では評価が違った項目である。ゲストティーチャーや外部人材を活用した教育活動を多く取り入れているが、教職員の評価が低いのは、もっと家庭と連携できればという思いが強いと思われる。学校だよりや連絡帳を通じ、粘り強く働きかけを強めていきたい。	